資料４－５

都市再生ビジョンに係るこれまでの審議のポイント

※　下線部は、前回（平成 15 年 10 月 20 日）第 5 回都市計画部会での審議内容

第１章　都市をめぐる社会経済情勢

（ライフスタイル）

・ ライフスタイルについては、一人世帯、二人世帯、家族世帯等タイプを分けて検討する必要がある。
・ 大学の立地は、学生がどこに住み、どのようなアルバイト・職業を選択するのか等の生き方に大きな影響を与える。
・ 2 箇所くらいの土地を行き来している人が増えている。
・ 中心市街地と自然的なエリアとの中間、郊外部での新たな居住スタイルがあるのではないか。国土の環境保全の観点からも重要。

（超高齢化）

・ 高齢化社会における、総体的なプランが必要。

（産業）

・ 産業分野において、国際社会でいかに知的活動による付加価値をつけられるかが重要。あわせて、情報インフラの整備といったことの検討が必要。
・ <u>社会経済情勢の分析において、バブル期の企業活動によって生じた虫食いの土地問題、2003 年問題、不良債権問題等に触れるべきではないか。</u>

第２章　都市再生に向けた政策の基本的な方向

・ 日本では、フィランソロピー（社会貢献）の考え方が弱い。
・ 空間の地球化、時間の人生化といった考え方が大切。
・ 都市の再生にあたっては、ヒューマン・スケール、一人の人間が生活する場としての視点が重要。
・ 都市は単立できない。従来、都市の税収を交付税等で再配分していたが、今後は、どのように都市の活力を地方に返していくかが重要。都市と地方が対立してはいけない。地方に支えられているという認識が重要。
・ 都市の多様性に対する認識を、まず第一に持たなければならない。

・ 全体の標題部分に防災面でも防犯面でも「安全」という点、それから「エコロジー、環境回復」の点が出てきていない。「都市美空間」についても、「造景」だけでは、かつての米国におけるシティ・ビューティフル運動が想起されるが、ここでは、環境回復や安全ということがもっと見えるようにすべき。
・ コンパクトシティとは、色々な機能、要素がパックされており、選択のチャンスが大きいということで、大都市よりは、むしろ地方都市で成り立つ。大都市では、部分的に成り立つものと考える。
・ 「官民のパートナーシップ」、「官民コミュニティのパートナーシップ」という文言について、整理が必要。
・ コンパクト化するということを明記すべき。高層化、コンパクト化することで、緑地も確保でき、道路率も増える。新しいテクノロジーや今後の都市の産業形態や生活形態の変化も前提とした新しいビジョンをつくるべき。
・ 古いものをどう維持するかということも考えて欲しい。
・ 市町村合併などにより、都市住民はより広域的に緑を求めるようになるのではないか。その辺りを考えて欲しい。
・ 世界都市といったときに、生活機能の向上、質の向上といったことにも努力してきていることに留意すべき。
・ コンパクトシティとは、ヒューマンスケールで子育てや高齢者の生活が営まれ、エネルギーや廃棄物、排水処理等を含んで、ある程度自立型の都市と理解している。そういった都市が必要だということを書き込んで欲しい。
・ 都市農業や都市農地の話について触れるべき。

第３章　政策転換の基本的視点

・ 政策実現の手法は、課題に応じて「規制・誘導・事業等」の最適な組み合わせが選択されるべきで、その際、地域の自立性・多様性の確保が重要。
・ 都市政策の総合性は、まだ不十分。
・ ナショナル・ミニマムの実現には規制的手法、標準的装備のためには誘導的手法、望ましい姿の実現のためには合意的手法が適しているというような手法の使い分けに関する基準が見出せるとよい。

・ ビジョン策定にあたっては、常に国としての視点が必要。
・ 建築規制や道路、河川分野、さらに教育や福祉等様々な分野にまたがってビジョンを作成してよいと考える。
・ 緑については、樹木に限定されるのではない、もっと幅広いものだと分かるようにしたほうがいい。
・ 地域文化というときに、全国の各都市が東京に追随するのではなく、それぞれの個性で頑張れるような意味が含まれていたほうがいい。地方都市が元気になることを書き込んで欲しい。
・ 右肩上がりの経済のときの制度のまま、今後の変化に対していけるのかということに触れるべき。

第４章　都市再生への 10 のアクションプラン

・ 都市が多様であるという観点からすると、負の遺産というものは、本当は、ないのではなか。
・ 負の遺産は、必ず解消しなければならない。
・ アクションプラン「１．駅周辺の拠点的エリア（歩行生活圏）を中心とした生活・活動・交流空間づくりによる全国都市再生」と「３．まちの中心を再生させる民間投資の拡大」の違いを明確にするべき。

（大都市圏の国際競争力）

・ 明治、大正、昭和と先人が築いた都市の財産を活かしながら、歴史的な厚みのある文化を感じさせる都市をつくっていくという複眼的な価値観と都市の景観づくりの発想が希薄ではないか。
・ 暮らしの国際競争力を高めて欲しい。

（景観）

・ 景観には、「view」と「substantive」という二つの意味があるから、「scenery」なランドスケープだけではなく、生態系を基盤とした地面の凸凹に沿ったランドスケープの両方を扱うということを書き込んで欲しい。

（地域運営）

・ 地域運営の一番の課題は、人材と財源の問題。

- 地域運営の活動の意義・メリットを正しく測り、それに見合った公的補助が必要なのではないか。
- 地域運営について、地域のサイズに分けて議論すべき。
- 様々な地域運営のスケールがあるが、流域マネジメントの視点が必要。

（観光）

- 観光にしろ、景観にしろ、楽しい時間を提供すること、エンターテイメントが欠けている。
- 観光に出かけるのは高齢者であり、観光施策でこそバリアフリーは重要。
- 観光においては、地域の文化的な特色がなければ、いくら事業や観光に関するインフラ整備をしても意味がない。

（循環型都市）

- 廃棄物問題（特に大都市）を都市計画において検討すべき。
- 水関係だけでなく、より幅広に書いたほうがいい。

（安全・安心）

- 防犯や医療の問題も含めて、安全といったことが都市の魅力の上で重要。